

氏名	鈴木 文子 (スズキ アヤコ)
本籍	神奈川県
学位の種類	博士 (学術)
学位の番号	博乙第17号
学位授与の日付	2017年3月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	メンタルヘルス不調による休職者における職場復帰のセルフエフィカシーに関する研究－測度の開発と有用性に関する検討－

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	石川 利江
	(副査) 桜美林大学教授	森 和代
	桜美林大学教授	鈴木 平
	東京家政大学教授	福井 至

論文審査報告書

論文目次

第1章 序論	1
第2章 研究背景	2
第1節 労働者におけるメンタルヘルスの問題	2
第2節 メンタルヘルス不調による休職者の現状	5
第3節 休職および職場復帰の関連要因	6
第4節 休職者の職場復帰における評価の問題	10
第5節 職場復帰支援における介入方法の問題	16

第3章	本研究の目的	21
第1節	本研究の目的	21
第2節	本研究の意義	22
第3節	本研究の構成	23
第4節	用語の定義	26
第4章	メンタルヘルス不調による休職者における職場復帰の セルフエフィカシーに関する項目内容の収集【研究1-1】	27
第1節	休職者の考える職場復帰のセルフエフィカシーの 項目内容の収集	27
第1項	目的	27
第2項	方法	27
第3項	結果	28
第4項	考察	32
第2節	職場復帰の支援者が考える職場復帰のセルフエフィカシー の項目内容の収集【研究1-2】	34
第1項	目的	34
第2項	方法	34
第3項	結果	35
第4項	考察	37
第3節	職場復帰のセルフエフィカシーに関する項目内容のまとめ	39
第1項	調査により収集された職場復帰のセルフエフィカシーに 関する項目内容	39
第2項	復職セルフエフィカシー尺度項目の作成	39
第5章	復職セルフエフィカシー尺度の開発【研究2】	41
第1節	目的	41
第2節	方法	41
第3節	結果	43
第4節	考察	49
第6章	復職セルフエフィカシー尺度の妥当性の検討および就業状態別と性別による比較 【研究3】	52
第1節	目的	52
第2節	方法	52

第3節 結果	54
第4節 考察	65
第7章 復職セルフエフィカシーの影響要因の検討【研究4】	68
第1節 目的	68
第2節 方法	68
第3節 結果	69
第4節 考察	81
第8章 復職セルフエフィカシー尺度を用いた自己評価プログラムの 効果検証【研究5】	87
第1節 目的	87
第2節 方法	88
第3節 結果	94
第4節 考察	132
第9章 総合考察	139
第1節 要約	139
第2節 総合考察	145
第1項 職場復帰における評価と介入方法の現状と課題	145
第2項 職場復帰のセルフエフィカシーの構成要因と特徴	145
第3項 就業状態別の具体的支援方法	147
第4項 職場復帰過程における復職セルフエフィカシーと 支援方法	152
第3節 本研究の限界と今後の課題	156
第10章 結語	158
引用文献	160

謝辞

APPENDIX

論文要旨

うつ病等メンタルヘルス不調による休職者が100万人を超えた我が国において、休職者

の復職のための支援が重要な課題となっている。このような現状を踏まえ、本論文では対象者の職場復帰における具体的な課題や改善点を評価することができる復職セルフエフィカシー尺度を作成し、対象者に応じた支援方法を明確にしていく。そのうえでメンタルヘルス不調者の職場復帰の準備性を高めるプログラムの開発を行い、その効果検証まで含めて丹念に検討を行った論文である。

本論文は 11 章で構成されている。まず第 1 章序論で本研究テーマに着眼した経緯が述べられ、第 2 章では研究背景として、労働者におけるメンタルヘルスの問題、メンタルヘルスによる休職者の現状、休職と職場復帰の関連要因、職場復帰における評価の問題メンタルヘルス不調による休職と復職に関する研究背景が詳しくレビューされている。第 3 章では本論文の目的と構成が示され、各研究の位置づけを明確にしている。第 4 章以降は各論に入り、調査研究に基づく結果を丹念に検討している。第 4 章ではメンタルヘルス不調により休職した勤労者自身が考える職場復帰に必要なセルフエフィカシーの項目内容の収集を自由記述による調査を行なう、回答内容を先行研究と比較しカテゴリー化を試みている。さらに職場復帰に携わる支援者からも項目内容を収集し、職場復帰のセルフエフィカシーの構成要素を幅広くとらえることを試みている。その結果、84 項目の職場復帰のセルフエフィカシー尺度予備項目が作成された。第 5 章ではこの予備調査項目を用いてウェブ調査を実施し、因子構造の検討がなされ 9 因子 27 項目の多角的に評価可能な復職セルフエフィカシー尺度が作成された。第 6 章においてその妥当性を休職者、復職後 6 か月未満、復職後 1 年以上の就業状態別で比較と他の心理変数との関係性についても検討されている。その結果、休職者、復職者、健常者の順に復職セルフエフィカシー尺度得点が高まることが明らかにされた。第 7 章では復職セルフエフィカシー尺度の影響要因の明確化とその影響プロセスについて就業状態による相違を検討している。その結果、ストレスコーピングの直接的影響が明らかになり、ポジティブコーピングを高めネガティブコーピングを低減することで復職セルフエフィカシーの向上だけでなく精神症状の悪化を防ぐことが確かめられた。また、就業状態によって上司、同僚、家族や友人のソーシャルサポートは効果が変化することが明らかになり、家族や友人のサポートは常にポジティブな効果を示すが上司からのサポートはプレッシャーにもなる可能性が示され、症状の経過観察の必要性が指摘されている。第 8 章では復職セルフエフィカシーを高めるための介入プログラムを作成し、従来の認知行動療法による介入との比較研究を行っている。その結果は、両プログラムともに復職セルフエフィカシーが向上し、両プログラム間で有意な差異は認められなかった。しかし、復職セルフエフィカシープログラムは自己の課題がより意識化されて目標設定に効果的である可能性も示されている。以上の結果を踏まえ第 9 章の総合考察では、復職セルフエフィカシーで評価できる特徴に基づき、休職者・復職初期・復職後期といった就業状態別の課題および支援の方法の具体的な提案とともに本研究の課題について論じている。

これらの研究に加え、101 件の引用文献、Appendix に調査票が提示されている。

論文審査要旨

学位請求論文提出後、主査と3名の副査による審査が行われた。本論文はメンタルヘルス不調による休職者の職場復帰の判断指標となる復職セルフエフィカシー尺度の作成と妥当性と信頼性の検討および介入研究という構成になっている。正確な開発手順を踏んで尺度作成がなされた復職セルフエフィカシー尺度は9つの下位尺度からなる総合的なものであり、信頼性・妥当性も問題なく、臨床的妥当性も高い尺度である。系統立てられたこの研究プロセスはオリジナリティのある内容とともに高く評価された。本論文は、メンタルヘルス不調による休職者の復職を扱った研究として貴重であり、関連する先行研究について詳細に検討したうえで休職者、復職者、休職未経験者の勤労者を対象とした十分なデータに基づき検討している点でも高く評価できる。うつ病等メンタルヘルス不調による休職者が急増している我が国において、職場復帰における具体的な課題や改善点を評価することができる復職セルフエフィカシー尺度を開発し、対象者に応じた支援方法を明確にした意義は大きい。本論文は健康心理学における研究の意義、有効性、独創性において、博士論文として十分な水準に達しているものと判断され、主査、副査全員一致して健康心理学の博士論文として合格であると判定された。

口頭審査要旨

公開での最終審査は、30分間の論文概要の発表、30分間の質疑応答、非公開での主査・副査による合否判定が行われた。パワーポイント資料が準備され、研究の概要についての説明がなされた。質疑においては、本研究で開発された復職セルフエフィカシー尺度以外にどのような就労条件が休職後の復職に影響するのか、調査方法としてインターネットによる調査を用いた理由はなにか、今後の課題などについての質問がなされた。これらの質問に対して、復職の影響要因として職場サポートや勤務時間の短縮などの環境調整なども重要であること、インターネットによる調査実施した理由として本研究の対象者が休職中、復職後6か月未満、復職後1年以上といった特殊な対象者であるため個人での依頼が困難であることなどがあげられた。また、今後の課題として非正規社員の復職の問題を検討する必要性についても述べられた。

休職者のリワークを評価するための尺度の特徴が明確に記述され、実践的応用分野における貴重な研究であり十分博士論文として通用するものであるとされた。最終的に博士論文の口頭審査は審査委員の全員一致で合格であると判定された。